矢筒城館跡 Ⅵ

個人住宅駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

長野県上水内郡飯綱町教育委員会

例　言

1．本書は長野県上水内郡飯綱町大字牟礼字表町 2355-6 番地所在の矢筒城館跡の第Ⅵ次発掘調査報告書である。
2．本調査は、国庫補助事業「町内遺跡（発掘調査等）」として、飯綱町教育委員会が平成 22 年度に実施した。
3．本書で使用した地図は国土地理院発行地形図（1：25000）、牟礼村作成の牟礼都市計画基本図（1：2500）、三島正之氏作図矢筒城縄張図（牟礼村遺跡詳細分布調査報告書　2000）である。
4．本書が扱っている国家座標は 2002 年以前の日本測地系（長野県第Ⅶ系）である。
5．遺物実測、トレース、軌筆、編集は横山かよ子が行ない、笹澤浩が全体を校閲した。
6．本書作成にあたって参考にした文献は巻末に書名で一括した。
7．発掘調査の記録と出土遺物は飯綱町教育委員会で保管している。
8．土地所有者の太田昌孝氏には調査にご理解とご協力をいただき感謝申し上げる。

凡　例

1．遺跡記号は「YZ」とした。
2．遺構の記号は　土坑：SK　　溝址：SD　　ピット（小穴）：P　とした。
3．実測図等の縮尺はそれぞれ図に示した。
4．遺物実測図では黒色土器は内面をアミ、珠洲焼の断面を黒色、陶器断面をアミで示した。

目　次

例言
凡例
目次

第１章　調査の概要……2
　第１節　調査に至る経緯……2
　　１．調査の目的と調査に至る経緯……2
　　２．調査体制……2
　　３．地区割の設定と調査方法……4
　　４．調査日誌抄……5
第２章　遺跡の環境……6
　第１節　地理的・歴史的環境……6
第３章　遺構と遺物……7
　第１節　基本土層……7
　第２節　遺構……7
　　１．土坑……7
　　２．ピット……7
　　３．溝址……9
　第３節　遺物……9
第４章　まとめ……11
引用・参考文献……12

表目次

表１　基本土層……7
表２　ピット一覧表……7

図目次

第１図　矢筒城縄張図……3
第２図　矢筒城館跡調査地点……3
第３図　矢筒城館跡・表町遺跡地区割図……4
第４図　調査区グリッド配置図……4
第５図　遺跡位置図……6
第６図　遺構全体図……8
第７図　出土遺物……9

写真図版目次

PL１　矢筒城館跡・矢筒山東麓遠景、全景（西より）
PL２　SD１・ピット群（東より）、SK１（西より）、SD１・ピット群（西より）
　　P１・P２・P３（西より）、調査区近景（東より）
　　P４・P５（南より）、遺跡遠景（東より）、調査風景

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１．調査の目的と調査に至る経緯

平成22年（2010）６月11日、太田昌孝氏から自宅車庫建設予定地の遺跡照会が飯綱町教育委員会になされた。矢筒城館跡は矢筒山にある山城と、矢筒山南麓にある居館跡からなる城館跡と考えられる遺跡である（第２図）。過去に町営病院建設に先立つ事前調査などが５次にわたり実施されてきた。

館跡は矢筒山山麓の内堀と自然の谷地形を利用した外堀から囲まれたなだらかな斜面上にあり、その南西寄りを中心に過去の発掘調査は実施されてきたが、館跡の中心施設などは明らかにされていない。このことは、発掘調査がトレンチ調査など部分調査に終始し、かつ小規模に終わったことにも関係する。

今回の調査予定地ⅢＩ区・ⅢＮ区は館跡の東隣で、過去の調査が及んでいなかった地区である。併せて、八蛇川高位段丘面の末端にあたる段丘崖上にある。段丘崖は八蛇川沖積面とは比高差70mと大きく、かつ急峻である。したがって今次調査は館跡の構造理解の上で重要な地区であると考える。

調査対象地は僅か30㎡と狭いが、調査予定地の重要性を考えて発掘調査を実施するに至ったものである。

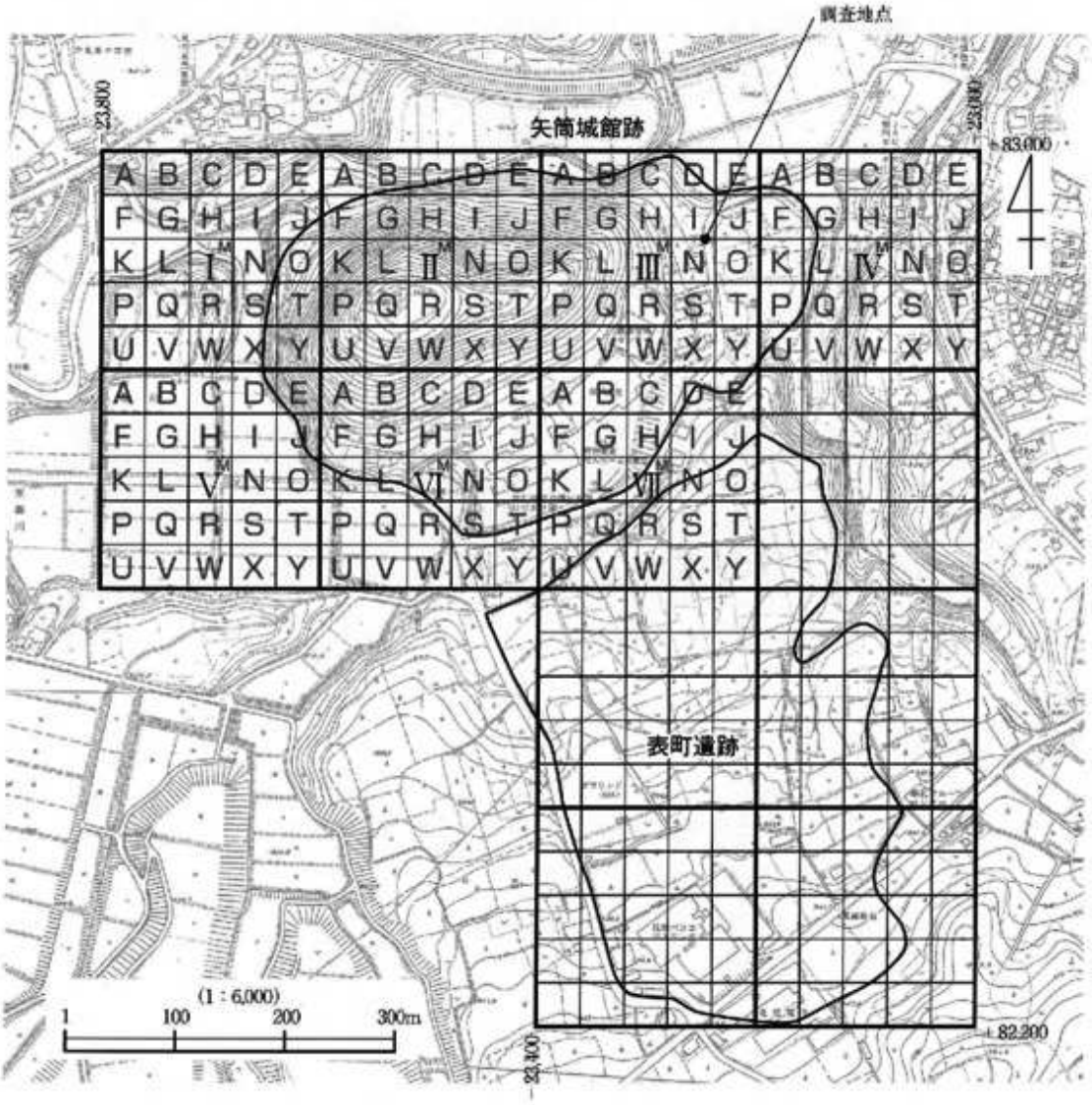
２．調査体制

調査主体者	飯綱町教育委員会教育長	相澤　壽（平成18年10月～平成22年11月９日）	
	〃	寺島　政次（平成22年11月10日～　　）	
事務局	生涯学習担当参事	早川ひさ子	
	企画員	小山　丈夫	
	主査	米澤　忍	
発掘調査団	団　長	笹澤　浩	
	調査主任	横山かよ子	
	調査補助	峯山真由美	高山いず美
発掘調査協力者		瀧澤　誠	鈴木三喜男

第1図　矢筒城縄張図（1：5,000）三島正之氏作図

1　第1次調査　昭和54年　飯綱病院建設時
2　第2次調査　昭和61年　健康管理センター建設時
3　第3次調査　平成9年　病院駐車場建設試掘
4　第4次調査　平成10年　〃　増改築時
5　第5次調査　平成10年　あづまや建設試掘
6　第6次調査　平成22年　駐車場建設時

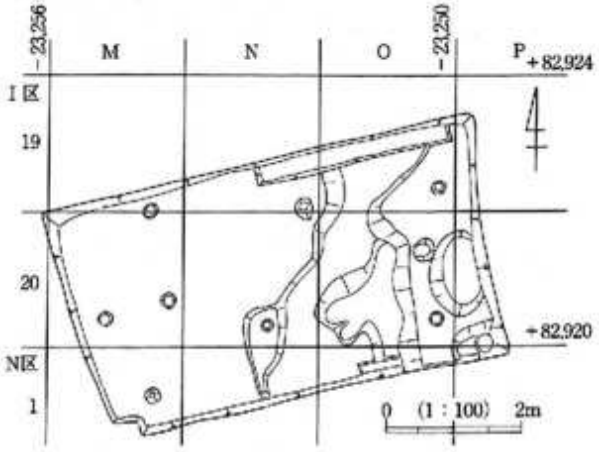
第2図　矢筒城館跡調査地点



第3図　矢筒城館跡・表町遺跡地区割図

3．地区割の設定と調査方法

地区割りの設定は矢筒城館跡とこれに接続して南側に展開する町屋と考えられる表町遺跡（MOM）を一体化と考え、両遺跡を網羅したものとした。すでに表町遺跡では長野県埋蔵文化センターにおいて実施済みであり（県埋文センター2009）、2009年の当教育委員会で実施した町道建設工事に先立つ事前調査時においてもこれを踏襲した（注1）。したがって、今次調査においても、表町遺跡の地区割をベースに、あらたに



第4図　調査区グリッド配置図

矢筒城館跡の地区割を設定した。すなわちX= 82,800 、 Y=23,400、を基点とした200m区画の大地区をⅠ～Ⅶ設定し、各大地区をA～Yの25区画を中区画（40m×40m）とし、それらをさらに2m四方の小区画（グリッド）とした。小区画は西北端を基点とし、東西にアルファベット（A～T）を、南北に算用数字（1～20）を配して表現した。ただし、大地区Ⅶ地区はすでに表町遺跡調査の時に長野県埋蔵文化財センターによって表町遺跡大々地区Ⅰ区と設定されている。したがって、地区割が重複するので、町道より北側の矢筒城館跡はⅦ区として、表町遺跡の地区割から除外した。ただし、地区割そのものは共通の基盤に立脚するので一部呼称のみの変更である。

以上から、今次調査区は大地区Ⅲ区で、中地区Ⅰ、小地区のM～Pの19・20、および中地区N、小地区M～Pの1に係わるグリッドからなる。しかし、発掘調査においては、狭い範囲であることと、深く掘削するという工事工法を考慮に入れて、調査予定地に合わせた仮の調査区を設定し、後日本調査区に読み替えた。

発掘調査は表土から人力によって実施した。調査面積・予想される遺構の性格と工事工法などを考慮に入れてのことである。測量は簡易遣り方実測であり、レベルは町道K1－3号線原点KBM3－1（520.895m）によった。尚、遺物の出土地点等は、仮調査区のために、本調査区への移動を前提として、主要なものは出土地点を記録した。

(注1)、長野県埋蔵文化財センターでは世界測地系に基づいて実施した（埋文センター2009）とあるが、照合の結果、日本測地系であることが判明した。

4．調査日誌抄　(2010年)

7月16日（金）晴れ

調査初日。調査範囲に仮のグリッド（2×2m）を設定し、南東隅から西へ掘り下げる。

レベル原点の設定。

7月20日（火）晴れ

Ⅰ層下位にP1、P2検出。

近代陶器の壷がⅠ層の最下位から出土。

7月21日（水）晴れ

Ⅱ層途中まで掘り下げ。

土層観察用にトレンチを調査区西側中央に設定し、Ⅲ層、Ⅳ層まで掘り下げる。調査区北側Ⅱ層に土師器片数点出土。調査区の西北隅にP3を検出。検出面はⅡ層下部。

7月22日（木）晴れ

調査区南側で地山を検出。

溝（SD1）の存在が予想される。縄文土器、珠洲焼片、カワラケ等が出土。いずれもⅢ層からである。P1、P2を半分割。

7月23日（金）晴れ

P1、P2、P3 実測と写真撮影。調査区南側で地山まで掘り下げる。浅い落ち込み溝SD1を確認。

7月26日（月）晴れ

Ⅲ層遺構検出作業。

7月27日（火）晴れ

ピット5基検出。(P6～10)

ほぼ発掘作業終了。

7月28日（水）晴れ

全体写真撮影。　遺構実測と壁面土層図作成。

発掘用具撤収。

7月29日（木）時々雨

土層図作成。遺構チェックとレベリング。

7月30日（金）

遺構図最終確認。　調査終了。

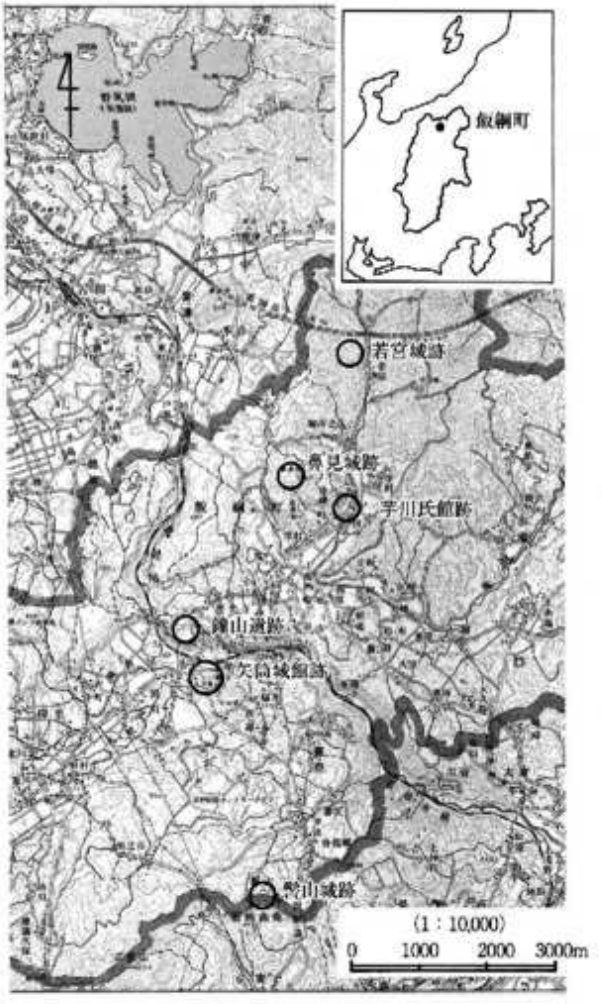
8月から12月

室内整理。　図面整理、遺物整理、原稿執筆等の報告書作成。

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的・歴史的環境

飯綱町からは北信濃において北信五岳の名で親しまれている飯綱山、戸隠山、妙高山、黒姫山、斑尾山を一望できる。その西に位置する飯綱山は起伏を繰り返しながら東へと裾野を広げ、その末端部分の盆地状の地形に牟礼地区が立地している。この山麓と盆地状地形の接する部分にはいくつもの小丘が点在する。矢筒城館跡のある矢筒山は標高566.7mでそのうちのひとつで代表的な独立丘である。西側は急傾斜で東側はなだらかに裾を伸ばしている。北側は急峻で約70m下方に八蛇川が流れ、牟礼の市街地を東流する鳥居川に合流している。西側と北側の周囲は水田、南側は北に緩やかにくだる台地上に果樹園が広がる。また東側下位段丘面には北国街道が通過している。



第5図　遺跡位置図

飯綱町における中世の遺跡は山城・館跡・集落遺跡と伝寺院跡などがある。山城は牟礼地区に矢筒城（牟礼村1997、牟礼村教委1981・1988）・磐山城（牟礼村誌1997）、三水地区に鼻見城と若宮城（三水村1980）がある。館跡は芋川氏館跡（三水村教委2002・2003）があり、鼻見・若宮の二城は芋川氏との関係があると云える。うち矢筒城館跡と芋川氏館跡が発掘調査されている。集落遺跡は鐘山遺跡（三水村教委1984）と表町遺跡がある。後者は矢筒城館跡の町屋遺跡で、2005年から3ヵ年をかけて県道建設に先立つ発掘調査で中世の村落形態の一部が明らかとなった（埋文センター2009）。2009年度には町教育委員会の町道建設の事前調査で、同様に中世に係わる多くの遺構が検出された。このほか表町遺跡をはじめ西四ツ屋遺跡などで古代の集落跡も検出され（埋文センター2009）、東には前高山古窯跡群など大窯業地帯がある（牟礼村教委1986・1992）。遺跡周辺が、古代以降、主要な歴史の表舞台であったことを知るのである。

第3章　遺構と遺物

第1節　基本土層

調査地は八蛇川の高位段丘面で末端部にあるために、地山である黄色粘土までは表土下90cmと比較的深い。Ⅰ層は耕作土でⅡ・Ⅲ層は黒色・漆黒色土で約70cmと厚い。第Ⅰ層から第Ⅱ層上部は近現代陶器片が出土し、Ⅱ層下部で遺構が検出でき、中世及び以前の遺物が出土した。中世の地表面がこの所にあったことを示している。

表1　基本土層

層	厚さ（cm）	属　性
Ⅰ	20	黒褐色土
Ⅱ	30	黒色土
Ⅲ	40	漆黒色土
Ⅳ		赤褐色土（部分的）
Ⅴ		黄色粘土（地山）

縄文土器片も第Ⅲ層下部から出土しているところをみると、Ⅱ層から地山の黄色粘質土に至る層序は比較的安定していたと思える。

第2節　遺構

1．土坑

SK1　調査範囲の東端に検出された。南北に長い楕円形である。長径1m、短径約70cm、深さ20cmを測る。地表下50cm、Ⅱ層黒色土中で検出された。Ⅲ層の漆黒色土からカワラケ（第7図、14）が1点出土している。

SK2　調査範囲東端のSK1に隣接して検出された。その性格については不明である。

Ⅲ層漆黒色土層で検出された。調査範囲外まで延びていたため未掘部分はあるが長径70cm以上、短径40cm以上となる。土坑と切りあうピットP15が検出し深さは約20cmを測る。遺物の出土はない。

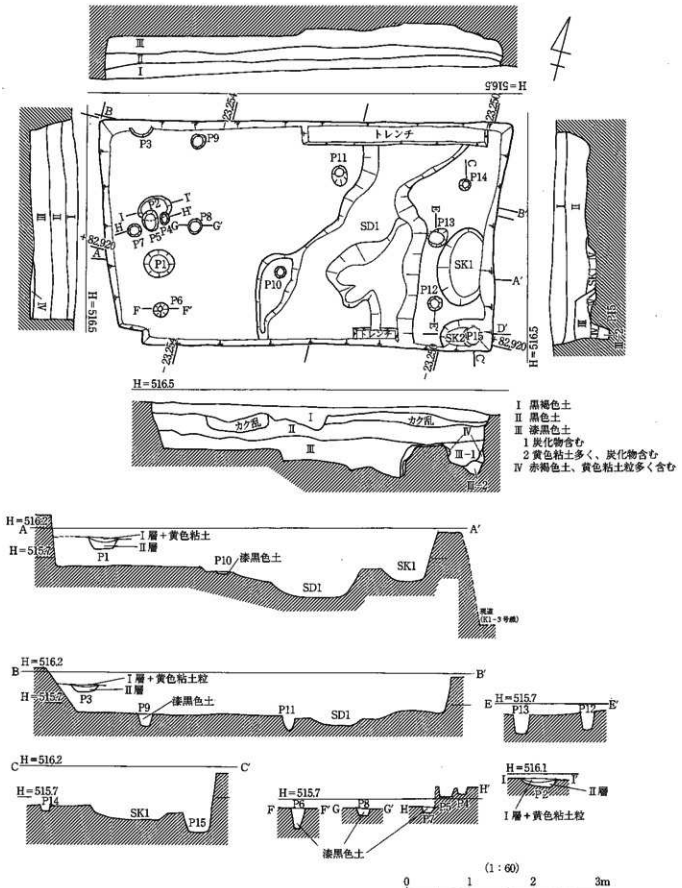
2．ピット

ピットは15基検出されている。検出状況からA・B群の2種類がある。　A群はP1、P2、P3の3基で地表下30cm、Ⅰ層下位から検出され、Ⅱ層上位まで掘り込まれていた。遺物はないが検出状況から近世か近代以降のものと考えられる。

B群はP6～P9でⅢ層の漆黒土層で検出された。法量は直径が20cmから24cmと同規模の大きさである。　深さはP7・P8・P9が10cmから20cmであるなかでP6は30cmと深い。これらは大きさ、深さ、埋土が共通しており、SK1と同レベルで検出され、第Ⅲ層の形成がカワラケの出土から中世であるところから、中世のピットとしてよい。同様にP10からP14も検出面はSK1とほぼ同じか幾分下層であり、中世のものとおもわれる。

表2　ピット一覧表

遺構番号	直径(cm)	深さ(cm)	検出層位	分類(群)
P1	40	20	Ⅰ下	A
P2	60	12	Ⅰ下	A
P3	40	12	Ⅰ下	A
P4	12	14	Ⅰ下	B
P5	26	14	Ⅰ下	B
P6	20	30	Ⅲ	B
P7	24	10	Ⅲ	B
P8	24	12	Ⅲ	B
P9	20	20	Ⅲ	B
P10	20	5	Ⅲ	B
P11	20	20	Ⅲ	B
P12	20	26	Ⅲ	B
P13	30	30	Ⅲ	B
P14	16	10	Ⅲ	B
P15	35	20	Ⅲ	B


Ⅲ
Ⅱ
Ⅰ
H=516.6
トレンチ
P3
P9
P11
P14
P2
P7
P5
P4
P8
P1
P10
SD1
P13
SK1
P12
SK2
P15
Hトレンチ
H=516.5
カク乱
Ⅰ 黒褐色土
Ⅱ 黒色土
Ⅲ 漆黒色土
1 炭化物含む
2 黄色粘土多く、炭化物含む
Ⅳ 赤褐色土、黄色粘土粒多く含む
Ⅰ層＋黄色粘土
Ⅱ層
漆黒色土
Ⅰ層＋黄色粘土粒
(1：60)
0
1
2
3m

第6図　遺構全体図

おそらくピット群には柱穴を多く含むと思われるが調査範囲が狭く断定はできない。

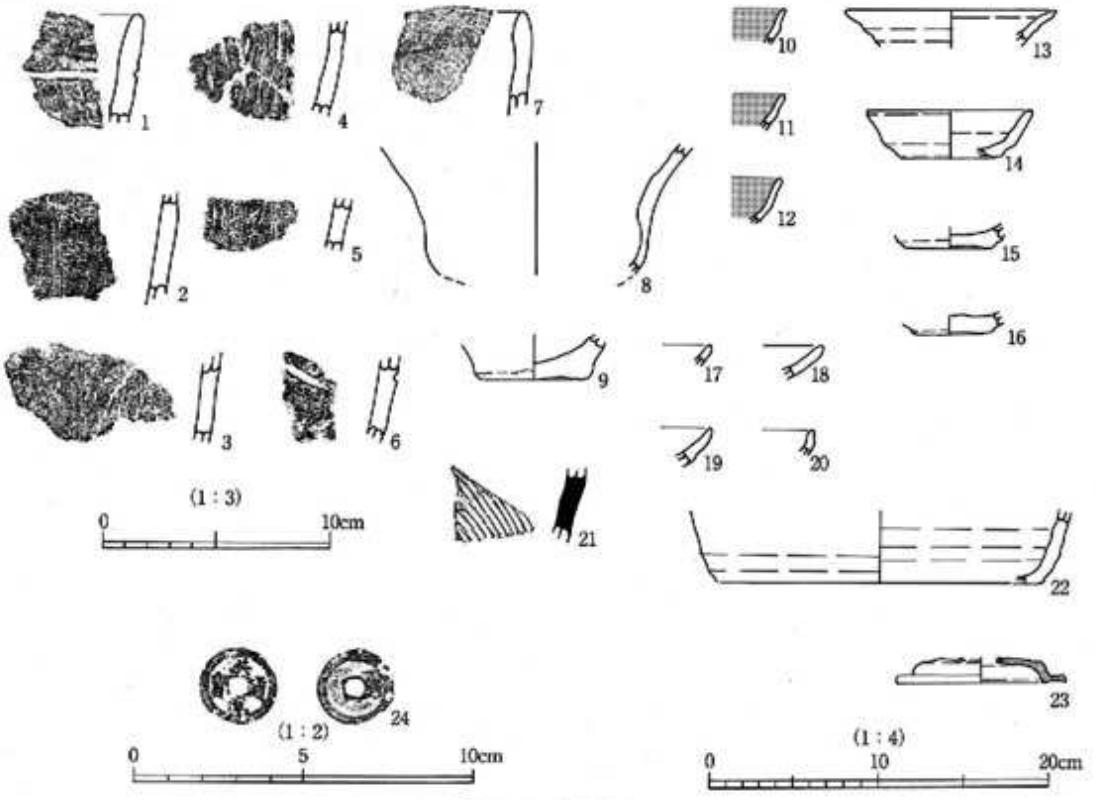
3．溝址

SD1　調査区東側にⅢ層の漆黒色土層で検出された。埋土は赤褐色土に黄色粘土が混じる（Ⅳ層）。全域には見られないこの部分だけである。溝は西から東へ傾斜しながら南北方向に続いている。幅、深さとも一定ではなく、広いところで幅1.4m、狭いところで60cmと蛇行して形態が一定でない。深さは縁部分の浅いところで20cm、最も深いところで40cmを測る。自然の流路であろう。遺物は縄文中期の同一個体の深鉢片（第７図、１～５）が出土している。

第３節　遺物

面積約30㎡のなかで遺物の出土数はいずれも小破片ではあるが100点を超えた。調査地は古くから畑として耕作されてきた土地であり、近年では住宅建設、公共道路工事などで地下の浅い部分では多少なりとも影響を受けてきたことは考えられる。よってⅠ層（表土）からは土師器、黒色土器、カワラケ、陶器などが平安、中世、近現代と遺物（第７図）が混ざり合って出土している。

縄文土器（１～９）１～６は　溝SD1埋土（Ⅲ層、Ⅳ層）から出土している。１から５は同一個体であり、縄



第７図　出土遺物

文中期後葉の深鉢形土器である。太い沈線で区画した無文帯の口縁部と縦方向の櫛描条線文を描く体部片である。胎土は粗い。6は摩滅しているが太い沈線がある。1と同様中期後葉の深鉢である。7は波状口縁で胎土は粗く内外面はミガカレている。8は内外面ともミガカレ後期精製土器の鉢形土器であろうか。明褐色である。口縁に続く上半部分がくびれから大きく開く。下半部分が上半に比べ極端に薄い。下半部分直径は26cm、現高は15cmを測るが細部は不明である。9は深鉢の底部である。

土師器　甕25点、坏5点の小破片がある。粘土紐巻上げロクロ成形とケズリ痕を残す北信型甕とロクロ成形の中型甕である。主にⅠ・Ⅱ層で出土している。

黒色土器（第7図、10～12）　実測不可能な小破片11点が表面採集とⅠ・Ⅱ・Ⅲ層で出土した。

カワラケ（13～20）　13・14は復元実測できたが、他は計測不可能な小破片である。13は口径12.4cmと大きめである。口縁部は体部から折り返すように強く外反し、皿状の形態となる。出土層はⅢ層上部であり珠洲焼（21）と同レベルである。14は土坑SK1のⅢ層埋土からの出土である。法量は口径9.8cm、底径5.2cm、器高2.8cmを測る内面下半に油煙が付着している。底部は糸切で灯明皿である。17から20は口縁部の極小破片で大きさは計測不可能である。17と18は素直に外に伸びている。19は口縁端部が尖り底部が厚くなる。20は口縁端部が内湾する。Ⅰ～Ⅱ層から出土している。15は底径5cmを測り磨耗している。16は糸切痕をもち底径4.4cm、内外両面とも油煙が付着し光沢を持つ。灯明皿である。色調はほとんどが茶褐色系統のなかで13のみ灰色系統である。

珠洲焼（21）　1点でⅢ層上部出土である。叩きのあり方からⅤ期（吉岡1994）のものであろうか。

内耳土器（22）　小片21点が出土した。図示できたものはⅢ層出土の22のみで底径19cmである。このほか約半数がⅡ層の出土である。

陶器（23）　Ⅰ層・Ⅱ層出土で小破片である。23は近代以降の小鉢類の蓋である。他は極小破片で染付け、青磁、瀬戸系磁器、鉄釉がかかった陶器などが数点出土している。

銭貨（24）　調査時ではないが土地所有者が隣接の畑を耕していた時に2点を採集したものである。

洪武通宝　明で1368年鋳造開始で背文字は背右に『一銭』と微かに読める。

半銭銅貨　明治6年鋳造開始で腐食していて拓本では読めない。

第4章　ま　と　め

矢筒城館跡は過去において5箇所調査されている（第2図）。

1．第1次調査　昭和54年の飯綱病院建設時（矢筒山南麓）（牟礼村教委1981）

土坑　柱穴　掘立柱建物跡　石積み　列石が検出されている。掘立柱建物跡は柱穴の一辺が80cmの方形の掘り方で規模が大きく中世のものとは考えにくく、平安時代の建物跡のようである。石積みには割れた石臼も混じえている。これは中世より後、耕地化に伴なう石積みの際に用いられたものである。いずれにしてもどの遺構も時代の特定は困難である。

遺物は平安時代の黒色土器、須恵器甕片、中世の石臼　茶臼　珠洲焼　内耳鍋　陶磁器がある。

2．第2次調査　昭和61年　健康管理センター建設時（矢筒山南麓）（牟礼村教委1988）

断面V字型の内堀の一部が調査された。幅9～12m、深さ3.5mの規模である。

3．第3次調査　平成9年　飯綱病院新駐車場建設時試掘（矢筒山東麓）

土師器、陶器の小片が僅かに出土する。はっきりした遺構はわからなかった。

4．第4次調査　平成10年　飯綱病院増改築時（矢筒山東麓）

報告書未刊行であるが検出された遺構は縄文時代落とし穴、無数の柱穴と少なくとも4棟の掘立柱建物跡がある。遺物は小片ではあるが、中世の内耳鍋、カワラケ、陶器などと少量の平安時代の土師器、須恵器が出土した。

5．第5次調査　平成10年　山頂にあづまや建設時試掘（矢筒山山頂）

北側にトレンチをいれた。部分的に石積みがある。

今回の調査地の面積は約30㎡でごく狭かった。しかしその割には遺物は縄文時代から平安時代、そして中世と小片ながら100点を超えて出土した。遺構はピット、土坑、溝が検出された。このうち土坑SK1の埋土にはカワラケ片が含まれており、併せて検出面の検討から検出したピット群の多くも中世の遺構と思われる。

調査地は矢筒荘、飯綱病院、健康管理センターが建設された矢筒山南麓の平坦地に続く東麓平坦地であり、八蛇川の段丘上となる。北側は段丘崖で急峻で自然要害ともなる。矢筒城館跡を解明していくには重要な場所である。隣接地にはかなりの遺構が予想される。

これまでの調査は矢筒山裾の西寄り部分が中心であった。しかし、今回はじめて東麓に狭いながらも調査が及び、そこに中世の土坑及びピット群を確認しえたことは今次調査の最大の収穫である。矢筒城館跡は山城と居館跡さらに町屋（表町遺跡）が一体で確認できる長野県下でも数少ない遺跡と云える。

町屋である表町遺跡は県道開設に先立つ長野県埋文センター及び町道建設に伴う町教委の調査で実体が少しずつではあるが明らかとなりつつある。こうした中で過去の居館跡の調査は必ずしも十分なものであったとは言いがたい。芋川氏館跡とともに飯綱町の代表的な中世の遺跡である本遺跡の解明と保存活用に今次調査が大きく前進する上で小さいながらも一歩となるものである。

若宮城跡、鼻見城跡　芋川氏館跡　磬山城跡などなど飯綱町の戦国時代はにぎやかである。さらに矢筒山が矢筒城館跡としての全体像が明らかになったときに史跡としていかに現代の生活に活かし、いかに正しく将来に伝えていくかが今後の課題となろう。

引用・参考文献

中郷村史刊行会　1960『中郷村史』

牟礼村　1997『牟礼村誌　上　自然　原始　古代　中世　近世』

三水村　1980『三水村誌』

長野県　1936『長野県町村誌　北信篇』

上水内郡誌編集会　1976『長野県上水内郡誌』歴史篇

三水村教育委員会　1984『鐘山遺跡』

2002『芋川氏館跡発掘調査報告書』

2004『田中下土浮遺跡・芋川氏館跡（第３次）発掘調査報告書』

牟礼村教育委員会　1981『矢筒城館跡』

1986『前高山窯跡群』

1988『矢筒城館跡』第２次発掘

1992『平出遺跡群発掘調査報告書』

2000『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』

信濃史学会　2000「信濃史学会研究叢書５」『信濃中世の城跡』

長野県教育委員会　1983『長野県の中世城館跡　―分布調査報告書―』

長野県埋蔵文化財センター　2009「（主）長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」『西四ツ屋遺跡　表町遺跡』

長野県埋蔵文化財センター　2000「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　27」『更埴条理遺跡・屋代遺跡群』

長野県埋蔵文化財センター　1999「小滝遺跡・北之脇遺跡・前山田遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書９』

矢野恒雄　1998『飯綱山の見える村々』

矢野恒雄　2000『信越国境小史―鳥居川のほとり』

吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』

矢筒城館跡・矢筒山東麓遠景

全景（西より）

SD1・ピット群（東より）

SK1（西より）

SD1・ピット群（西より）

P1・P2・P3（西より）

調査区近景（東より）

P4・P5（西より）

調査区遠景（東より）

調査風景

報告書抄録

ふりがな	やづつじょうかんせき
書名	矢筒城館跡VI
副書名	個人住宅車庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	横山かよ子
編集機関	飯綱町教育委員会
所在地	〒389-1211長野県上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1番地 電話026-253-2511
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
やづつじょうかんせき 矢筒城館跡	ながのけん 長野県 かみみのくぐん 上水内郡 いいづなまち 飯綱町 おおあざ 大字牟礼	20590		36度 44分 49秒	138度 45分 37秒	20100716 ～ 20100730	35㎡	個人住宅の車庫建設

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢筒城館跡	集落	平安時代 中世	ピット 土坑 溝状遺構	縄文土器 内黒土器 カワラケ 内耳鍋	矢筒山裾の平坦地における中世遺構の検出で居館跡の広がりが予測される。

矢筒城館跡Ⅵ
個人住宅駐車場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　2011年3月31日
編集発行　飯綱町教育委員会
〒389-1211　長野県上水内郡
飯綱町大字牟礼2795-1番地
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
〒381-0027　長野市西和田1-30-3
TEL 026-243-2105　FAX 026-243-3494